

産業遺産と浦賀の歴史と今を伝える広報誌

写真：三浦高校写真部「1号ドック正面より」

## Contents

- 02 イベントリポート1  
活きているドックをおさめた写真展示  
ー第20回咸臨丸フェスティバルー
- 04 イベントリポート2  
夜のドックに灯がともる  
ーレンガドックのライトアップイベントー
- 06 連載 ドックのお話④  
昔、ドックで働いていた方へインタビュー
- 07 連載 うらが今昔④  
「明治末期の浦賀ドック」
- 08 チャリ ドック見学会  
ドックを見守る桜の木 ほか

### 浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業遺産が集積しています。

### レンガドック

レンガ造のドックは日本に2基しか存在しません。もう1つの川間ドックは現在ゲート(扉船)が開放され海と一体になっているため、ドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。



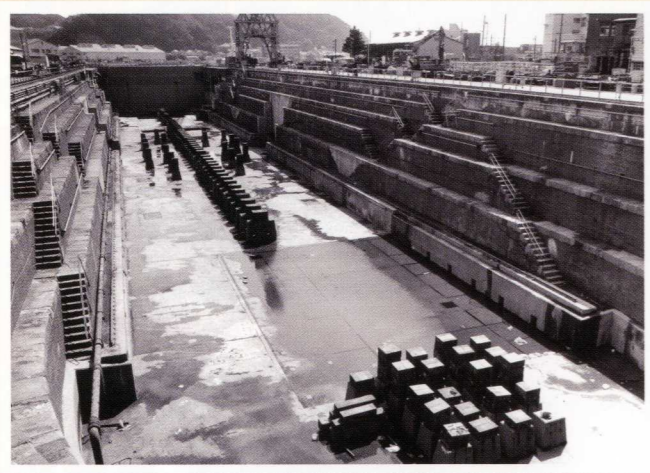
# 活きているドックをおさめた写真展示

## 第20回咸臨丸 フェスティバルに参画

記念すべき第20回目の開催を迎えた咸臨丸フェスティバルは、平成30年4月28日(土)に開催され、大盛況を博しました。そのフェスティバルに第55回目となるレンガドック活用イベントが参画し、国内唯一のレンガドック見学会や、浦賀ドックに関する展示を見ることが出来る「ワンデーミュージアム」を開催しました。

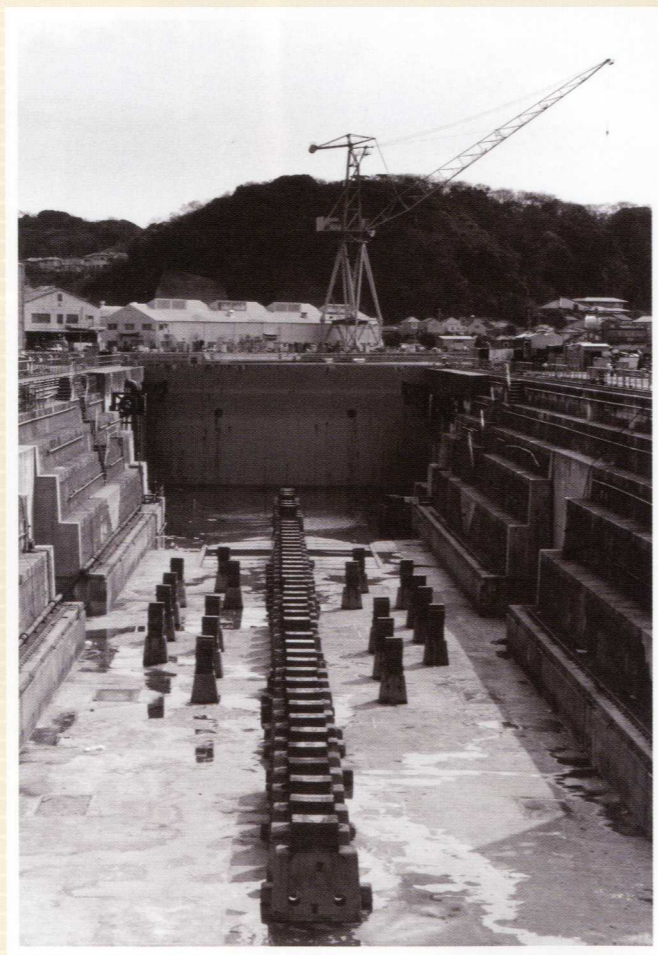
### ワンデーミュージアム 復刻、「浦賀造船所106年目の春」

**今** 回の「ワンデーミュージアム」では、浦賀ドックが閉鎖する直前に撮影された写真の展示を行いました。これらの写真は、三浦高校(現在の三浦学苑高校)写真部の生徒が平成15年3月に開催した写真展「浦賀造船所106年目の春」で展示されたものです。出品された写真は、生徒が前年の12月から4か月間にわたり撮影した約100枚の白黒写真で、浦賀ドックが生きていた最後の雄姿がおさめられたものでした。展示会后、写真は公開されていませんでしたが、今年、浦賀ドックが閉鎖されて15年の節目となることから、ワンデーミュージアムとして復刻し、撮影した生徒自身が付けたタイトル・キャプションもそのままに展示しました。消えゆく工場を目前に、生徒がどのような想いを抱いて撮影していたか、感じることができます。



ドック・ヤード

一号ドックです。閉鎖された今もその姿はそのまま見ることができそうですが、僕たちはこの時初めてその規模に驚きました。その規模を何とか画面に納めようと苦労している様子がわかる写真になっています。前夜降った雨が底に残り、3月のうららかな光の中で輝いて見えました。



1号ドック

1号ドックをシンメトリー(左右対称)に捉えた一枚です。ドミノのようにドックの底に並ぶ船底の支えが珍しく、階段のドックの壁も珍しく、撮影した時に面白い写真が撮れたと思っていました。

※写真・キャプションは全て当時のままご紹介いたします。



西日の中の旧本部

1月・2月には、西岸地区にはよく西日が当たります。もう少し時間が過ぎると山陰に入ってしまうのですが...。この写真も何気ないドックの一面です。静かなたたずまいをみせています。まだ、構内に入れなかったころ、こうした写真を何枚も撮りました。



小型クレーン

昭和20年6月のプレートのあるクレーンです。(中略)終戦2ヶ月前に作られたクレーンです。日本が材料不足の時代だったはずですが、きっとやっとの思いで造られたのでしょうか。軍艦を作ったり改修したりするために造られたのですが、すぐに終戦だったので戦後には大いに使われたことでしょうか。ということは、戦後の経済発展の土台作り役に役立ったのかな。そんなことを思わせるクレーンです。



1号ドック

部員全員でこのドックを撮っていますから、角度を変えて色々な作品になっています。でもなかなか全容を捉えることができないので難しいです。ドックの大きさを表現したいし、その深さや空気感も表現したいし、と思うんだけど、どうしても中途半端になってしまいます。



アームを伸ばして・・・

いっぱいアームを伸ばしていると、橋梁のように見える。クレーンのフックが移動していると造船所の活気を感じた。子供のころ、一度でいいから、あのクレーンの運転台に乗ってみたいと思ったのは、地元の子供なら誰も思ったことだと思う。一度、乗りたかったなあ・・・もう一度、心で呟いた。

### その他の展示、見学の模様

**展** 示した写真は全100点のうち10点です。ほかの写真についても、今後のレンガドック活用イベントなどで順次展示していきます。

(左)ドックの見学会でタワークレーンを見上げる人々。(右)ワンデーミュージアムに展示された本物の工具を見学する来場者。



— 夜のドックに灯がともる

# レンガドックのライトアップイベント

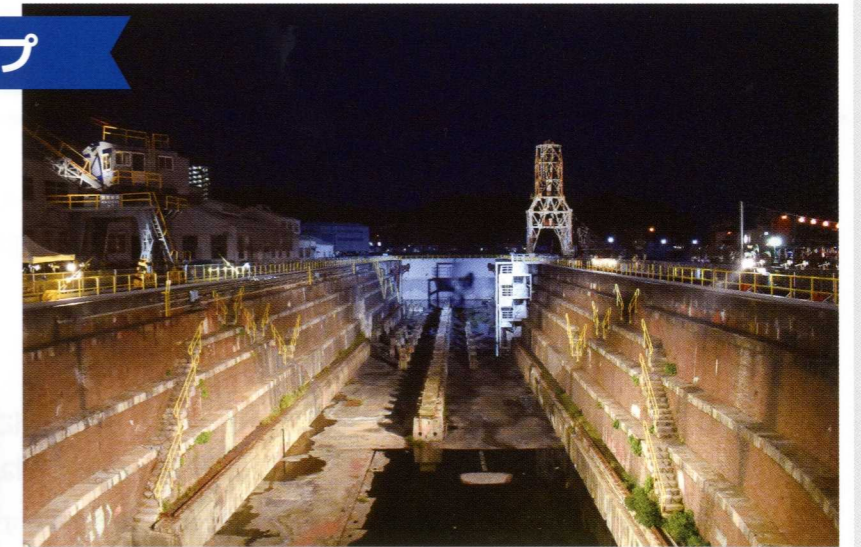
平成30年8月11日(土)に、浦賀ドックのコミュニティ広場で開催された浦賀夏まつりの関連イベントとして、第56回レンガドック活用イベントを開催しました。浦賀夏まつりとの同日開催は今年で2回目となります。



ライトアップされたドックの様子。

## ライトアップがパワーアップ

**昨**年度、初の試みとして試験的にライトアップを行ったところ、好評を博したため、改めて実施することになりました。今年は、より本格的なライトアップにするため、前回より照明数を増やし、ドック全体が明るく映るようになりました。



↑今年のライトアップ。奥まですべて見えるようになった。点灯式では、音楽に合わせて光が動く演出もあり、大いに賑わった。  
←昨年のライトアップ。ドックゲート付近が暗く見えない。

## 浦賀夏まつり

**ラ**イトアップイベントが今年も参画した「浦賀夏まつり」は、レンガドックの隣にある、浦賀コミュニティ広場で開催されました。このまつりは、地域の活性化のために毎年行われており、今年で9回目を迎えました。会場では参加者の皆さんがやぐらを囲み、盆踊りを楽しみました。そのほかにも、模擬店やダンスの披露、抽選会などが行われ、大いに賑わいました。



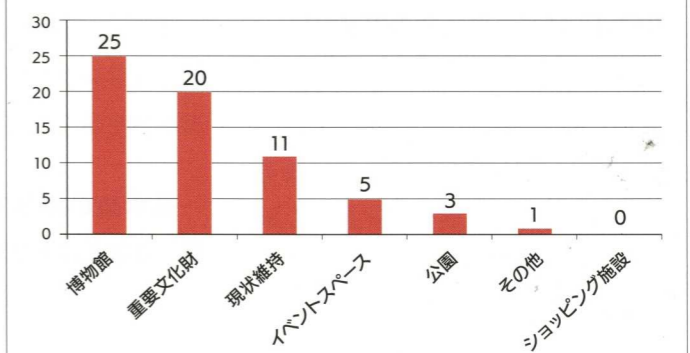
## 見学会のアンケート

**タ**方には、レンガドック活用イベント恒例の産業遺産見学会を開催しました。その中で、見学会終了後に、参加者へ向けて浦賀ドックに関するアンケートを実施しました。

「浦賀ドックをどのような形で活用してほしいか」という質問に対し、「博物館にしてほしい」など、レンガドックがある、今の姿を活かした利用方法を望む声が多くあり、見学に来る皆さんが歴史あるドックに深い興味を抱いていることが分かりました。

(参加者90人中42人が回答)

浦賀ドックをどのように活用してほしいですか？  
(複数回答)



## 昔、ドックで働いていた方へインタビュー

新造船が出来るまでの流れを、浦賀ドックで勤務した方に伺ってひも解いてきたこのコーナーですが、まもなく最後の工程に入ります。今回は、「電気艦装」について後藤朝次さんに伺いました。



後藤 朝次さん

### —「電気艦装」とは、どのような仕事ですか？

艦装は進水した船に様々な品物を取り付けることをいいますが、中でも私が居た電気課が受け持つ「電気艦装」は、その名のとおり電機関係の器具を取り付ける部門になります。

### —具体的には、どのような機材を取り付けるのですか？

配電盤や各種モーター、照明器具などの電気機器です。また、無線に使う通信機器、そして速度計、レーダー、ジャイロコンパスといった航海計器類。これらを取り付ける仕事です。また、これらは当然電線で繋がっていますから、配線の取付けも行います。そして、それらの計器類がちゃんと動くかを確かめる、調整試験なども担当でした。

### —浦賀ドックでは一般の商船だけでなく、海上自衛隊の護衛艦などもよく造っていましたが、その場合は取り付ける機材も増えたのですか？

護衛艦などの場合、特に武器関係が入ってくるので、やはり品物は増えます。護衛艦を造るようになってから、浦賀では5インチ主砲の試験をするための建物を建てたのですが、そこでも仕事をしていました。

### —電気課にいらっしゃったのに、武器関係の仕事もあったのですね。

今でこそ課が分かれています、以前は兵装も電気課の中でやっていました。

### —護衛艦を造ることに特化するため兵装課が出来たのですね。

艦砲が主な武器だったときは全て電気課でやっていましたが、武器が進化してミサイルが出てくると、状況が変わりました。

当時は、大学を出た職員が、アメリカヘミサイルの勉強をしに行ったこともあったみたいですね。兵装課が独立してからのことは、兵器艦装の仕事をしている人に聞いてみると良いかもしれません。

### —建造してきた船の中で、特に印象深い船はありますか？

やはり私の時代だと、日本丸です。あれに関わったことは、非常に幸せでした。思い出もたくさんあります。進水式には当時の皇太子殿下のご臨席のもと、美智子妃殿下が、支綱切断（ロープを切り、船台から船を進水させること）をされました。

### —進水後の艦装では、帆船特有の難しさなどはありましたか？

帆船だからと言って、電気機器は

大きく変わりません。むしろ航海計器などは、世界を回る船ですから、共通のものでした。ただ、日本丸は練習帆船ですから、当時考える機材をみんな積んでいたのは特別でした。

### —浦賀ドックでは、クラブ活動も盛んだったと伺っていますが、後藤さんの職場では、何か活動をされていましたか？

スポーツ関係は、みんな楽しんでやっていました。運動会や各課対抗のスポーツ大会があり、以前は大津や防衛大学のグラウンドを借りて、よくやっていました。

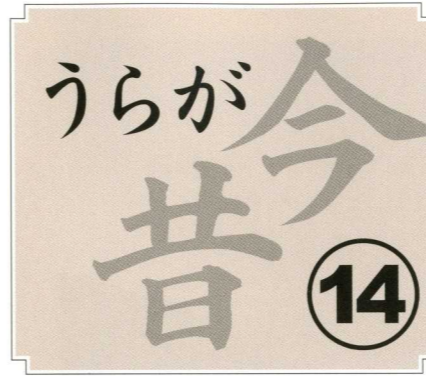
### —駅伝大会は今もありますね。

そうですね。あれも各課で力を入れていました。職場のまとまり、ということを見ると、みんなでスポーツをやることで一致団結していたのですね。

住友機械と合併してからも、住友重機械の会社全体で、課対抗のソフトボールやバレーボールの大会がありました。

### —スポーツを通して職場の関係を深めていたのですね。

船を造るためには、職場のまとまりが一番大事でした。個人でやる仕事ではありませんから、協力してやっていました。



日露戦争開戦1年前の明治36年(1903)1月、浦賀船渠株式会社(浦賀ドック)としては最初の外国からの受注艦であったフィリピン砲艦第1船「ロンブロン」が完成し、引き渡された。

開業まもない浦賀ドックにとっては、造船界に名乗りを上げるビッグチャンスであった。しかも一度に5隻もの受注を受けることができたのは、塚原社長自らがマニラに出向き、先頭にたって指揮をとったことが功を奏したと受け止められていた。

このフィリピンからの砲艦は、350tという大きさの鉄骨木皮艦(船体の骨組みに鉄骨を使用した船。木鉄交造船とも。)で、当時の鉄骨木皮艦としては世界最大級の船であった。明治35年10月、この砲艦の進水式に合わせて、創業以来正式な開業式を行っていなかった浦賀ドックは、内外の貴賓を招待して盛大な開業式を挙行了。

ところが、第2船の「マリンドキュー」の引き渡しを終えた明治36年4月、突如フィリピン政府から船体設計について見解の相違を指摘され、契約の解除を要求されてしまった。

この砲艦の船体は浦賀ドックで造ったが、エンジンから電気関係

## 明治末期の浦賀ドック

郷土史家 山本詔一

まですべてがアメリカ製であった。この砲艦をマニラに届けた浦賀の技師長・石川綾治さんが後日、話をしている記事を読むと「砲艦がマニラに着いたら、吃水(船の底面から水面までの距離)が約30cmも深くなっていた」と語っており、河川や沿岸を警備する砲艦にとって吃水が下がることは大きな問題であった。

結局、浦賀ドックで造った砲艦の3番艦から5番艦までは、契約解除されてしまった。浦賀ドックは日本政府に援助を求め、その結果、陸軍省に売却された。この後この3艦は扇海丸の第1から第3と改名されて、税関監視船として活躍した。

この責任をとって、創業いや創業にこぎつける以前から、浦賀ドックに心血を注いできた塚原周造社長は辞任をした。2代目社長には早崎源吾が就任した。

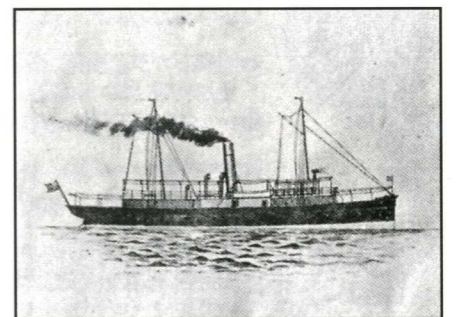
明治35年に横須賀海軍工廠で始まった国産の駆逐艦建造は、日露戦争後も続き、民間造船所にも建造依頼がくるようになった。浦賀ドックにも明治38年7月、海軍省からの受注が入った。はじめて駆逐艦・長月、菊月(381t)を建造できたという明るいニュースもあった。駆逐艦の建造は、竣工期限14か月という厳しいものであった。そのため建造工事のために工廠から応援を頼み、一方では工員数を増

加して38年末には1,820名の工員が、24時間体制で建造にあたった。この2隻の駆逐艦は期限内の引き渡し完了し、そのうえ、優秀な出来栄であるとお褒めの言葉をもらった。これ以来、太平洋戦争末期まで、「駆逐艦建造の浦賀ドック」の名が広がっていく。

しかし、経営的には設備の不完全さや経験不足からくる工員の超過があり、名声は得ても会社としての利益はほとんどなかった。

こうした会社の経営は、内外の経済不況と日露戦争中は軍事に徴用されていた船が徴用を解かれたこともあり、船舶の過剰現象が生まれた。ここから浦賀ドックは大きな試練を迎えることになる。

新社長に選出された町田豊千代氏は、効率化をはかる一貫として、東京にあった本社を浦賀町谷戸6番地(現在の浦賀ドック内)に移した。



▲フィリピン砲艦「ロンブロン」のイラスト。同艦の進水式並びに工場の開業式を行う際の招待状に描かれたものである。この後、同型艦の契約は解除されてしまう。

# ちろりドック見学会

～ドックを見守る桜の木～

**産**業遺産見学会に来たことのある方は、受付をするレンガドック先端付近に、1本の桜の木が立っていることをご存じでしょうか。

この木は、浦賀ドックが実際に工場として稼働していた頃から立っていたものです。浦賀が閉鎖した際にほかの樹木は撤去されてしまいましたが、この木だけは、住友重機械工業(株)がボランティアガイド「ドックと浦賀の歴史を愛する会」の要望に応え、保存してくれました。

クレーンたちと共に、ドックが稼働していた時代を見てきた貴重な生き証人のひとりです。



(上) 木の全景。  
(右) 桜のシーズンに見学会がないため、花を開く姿は見るできない。

## 「ドックと浦賀の歴史を愛する会」の会員になりませんか。

ドックと浦賀の歴史を愛する会は、レンガドック活用イベントなどで行われるレンガドック見学会のガイドや、造船技術を利用した工作体験の講師など、イベントの企画・運営に協力しています。

また、展示会用の浦賀ドックにある造船工具の整備や、浦賀ドックにかかわる歴史資料の収集などの活動をしています。イベント協力や、日頃の活動などを通して、レンガドックをはじめとする産業遺産の価値を多くの方々に再認識してもらい、これらを浦賀のまちの財産として、保存・活用していきたいと考えています。

浦賀のまちや工場に興味がある方のご参加をお待ちしています！(お問合せはレンガドック活用イベント実行委員会まで。)

### レンガドック活用イベント開催予定

第57回  
10/27  
(土)

#### 「日本を支えた、産業遺産の仲間たち」

- 浦賀ドックと川間、横浜など、ほかのドックを見比べるパネル展示
- ドックの底に下りられる見学会も行います
- 開催時間：13:00～15:00(予定)
- 募集期間：10月11日(木)～10月24日(水)

第58回  
11/23  
(金)

#### 「浦賀ドックOBによる座談会」

- 浦賀ドックに勤務していた職人さんに当時の仕事や町のようすを伺います
- 講演の後に、見学会を行います
- 開催時間：13:00～16:00(予定)
- 募集期間：11月11日(日)～11月21日(水)

- 場 所：住友重機械工業株式会社浦賀工場内「レンガドック活用センター」レンガドック周辺(浦賀4-7)
- 定 員：100名(先着制) ● 費 用：無料
- 申 込：横須賀市コールセンターで電話受付 TEL: 822-2500(受付時間 8:00～20:00 年中無休)へお申込みください。
- 詳細は：「広報よこすか10月号・11月号」及び市のHPをご覧ください。

本誌に  
関する  
お問合せ

レンガドック活用イベント実行委員会事務局 (横須賀市都市部市街地整備推進課内)  
〒238-8550 横須賀市小川町11 電話 046-822-8526 FAX 046-826-0420 E-mail ur-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp

発行 レンガドック活用イベント実行委員会